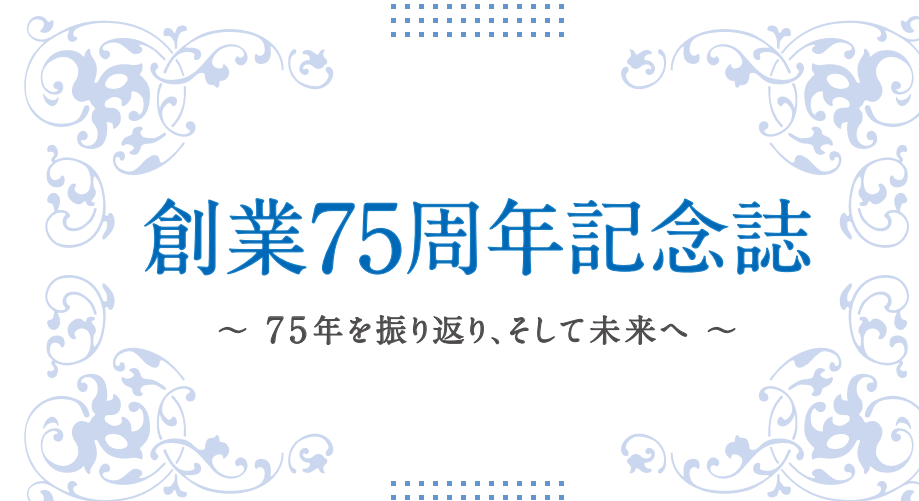




ご 挨拶



鈴新株式会社 代表取締役社長

鈴木 猛

鈴新株式会社は本年10月1日に、創業75周年を迎えることとなりました。

先代鈴木新助が生地千葉県佐倉市から17歳で上京、当時東京一の鉄鋼卸商であった野崎栄蔵商店にて奉公の後、妻・としと共に昭和10年(1935年)に宝町(現、京橋)にて創業。以来、戦中、戦後、幾多の日本経済の困難な状況を乗り越え、激動の時代に社業を進展させて参ることが出来ましたのも、ひとそにお取引いただきました関係者各位及び従業員の皆様方の、ご指導ご支援の賜と、厚く御礼申し上げます。

今年10月はまた、ちょうど亡父新助の十三回忌にあたります。先代は自伝のようなものを全く残さなかったため、これは75年という節目に過去を振り返りまとめたものと捉えております。社史と言うには未完の冊子ではありますが、鈴新株式会社を担ってくださるであろう次世代の皆様方の未来を考える糸口となり、これから鈴新株式会社の歩みを進めてくださるための一助となることを祈ってやみません。

これからも社員一丸となって、一步一步を積み重ねながら、便利で信頼される商社「鈴新」として、100周年を目指して努力して参りたいと存じます。引き続き、関係者各位の皆様にご指導ご鞭撻を賜りますよう、心よりお願い申し上げます、発刊のご挨拶とさせていただきます。

平成22年10月1日

目次

I. 鈴新のルーツ 3

II. 創業者 鈴木新助 10

1) その人生と鈴新 10

2) 人 柄 26

3) 創業の精神 27

4) 語 録 27

III. 鈴新の売り上げの変遷 28

IV. 人員の変化 28

V. これからの鈴新 29

VI. 年表 32

VII. 会社概要 34

あとがき 36

I 鈴新のルーツ ～それは神田から始まった～

□ 神 田

神田・日本橋周辺には鍛冶町、紺屋町、かつては鉄砲町、鍋町、塗師町、堅大工町、乗物町などの昔ながらの町名が残されており、江戸時代に集まり住んだ職人たちの職業から付けられたものである。今でもこの地域には、さまざまな業界の間屋や商店が軒をつらねている。

また、近くの小伝馬町、大伝馬町、馬喰町などの町名から、馬具にかかわる職人もいた。（伝馬とは馬の背に荷物を積んで、宿から宿に送る交通制度のことである）

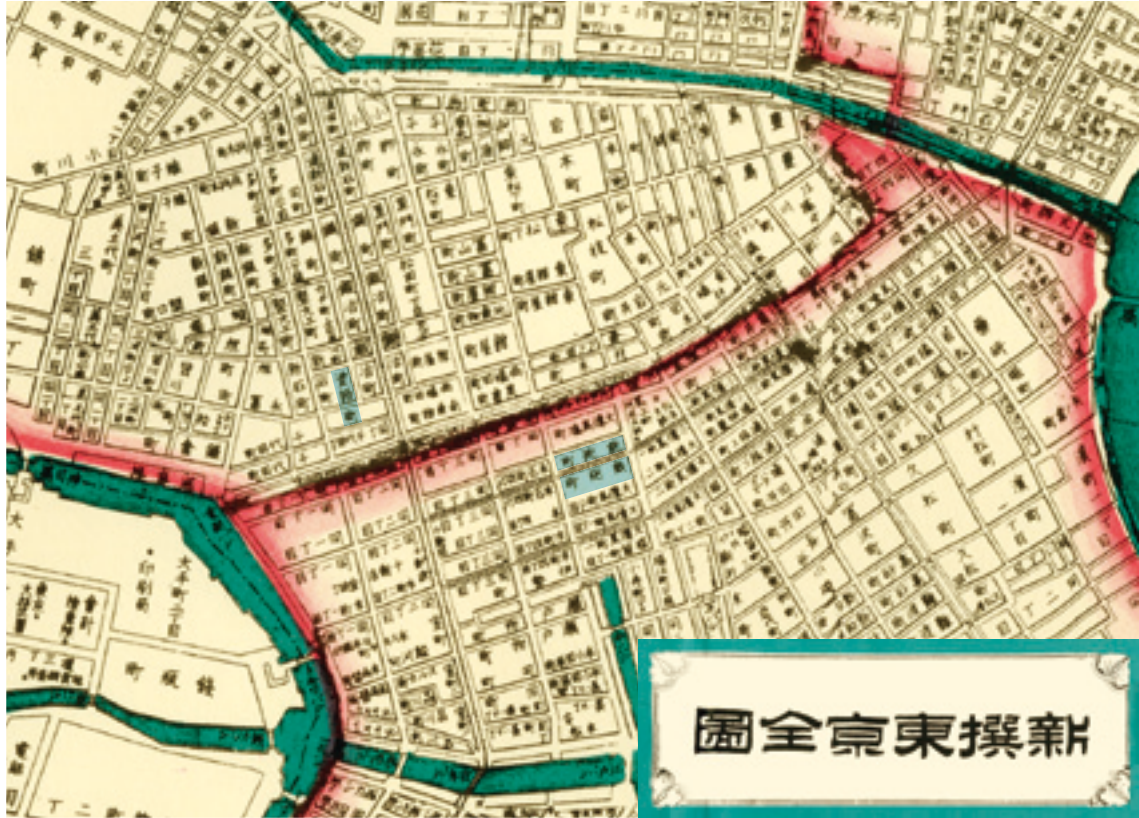
鍛冶町の名前の始まりは、江戸時代にさかのぼる。この近辺に幕府御用を勤める鍛冶方棟梁だった高井伊織が屋敷を拝領し、鍛冶職人が数多く集まった。文政7年（1824）の『江戸買物独案内』には、刃物や釘などを扱う卸売業者がいたことの記載がある。刀や薙刀といった打ち物を扱う業者も多かったようである。

鍋町（現在の神田鍛冶町三丁目あたり）は同じく江戸時代、幕府の御用鋳物師を務めていた椎名山城が屋敷を構えていたためと伝えられている。鋳物師とは、鍋や釜をつくる職人のことで、他に御腰物金具師や御印判師などが住んでいたようである。

鉄砲町（現在の室町・鍛冶町・本町あたり）は幕府の鉄砲師厩宗八郎の受領地として知られていた。（鉄砲が種子島に伝来したのは天文12年（1543）のことである）

江戸時代、神田界隈は日用品から馬具や武器まで、多種多様な商品が揃う町であった。

明治、大正を越えて、戦後、日本の復興期には家庭金物店、建設金物店、銅・真鍮・鉄販売店などが軒を並べ、神田駅南口から東神田までの大通りは「神田金物通り」として賑わった。



明治廿五年五月

ここに鈴新のルーツをたどるきっかけとなった平成7年(1995)12月13日の鉄鋼新聞記事がある。

社史を書くと決まった矢先、社長室の書類を

整理していたところ、まるで書いてくれとでも言うように、ひょっこり手元に現れた不思議なコピーである。

筆者の関口務氏は大正12年(1923)に本所で関口地銅所を創業の関口富美雄商店の二代目、現在は三代目が引き継ぎ、台東区雷門で事業を営んでおられる。

事実、先代鈴木新助は紀伊国屋三谷本店の流れの野崎栄蔵商店で修業し、のれん分けで鈴新の前身、鈴木新助商店を始めたのである。

7.12.13 鉄鋼新聞

江戸時代は別として近代鉄鋼・銅・金物等の流通を調べるべく、大別して日清、日露、欧州大戦から関東大震災までを第一期とし、期間は短いが以後大東亞戦争終戦を経て鉄の配給統制撤廃の昭和二十三年七月迄を第二期とし(伸銅品は二十四年六月撤廃)それ以後を第三期とする。

戦後五十年、これから流通は大きく変化し第四期を迎えることと思うが、この際、明日への飛躍のため過去を振り返ることこそ肝要かと願う。

特に第二期の配給と価格統制の時代については、これだけでも一冊の本になる、但し本にしても面白くない、面白いは統制違反(闇取引)の話だが、五十有金年経っ

た今でも懐かしく話したが、紙面の都合で今回は往年の問屋の屋号と社名について述べる。

明治二十二年勃行の東京鉄金物商店一覽表と照する番付を見ると、全部店名がなく社名と個人名である。

・田中精之・田中商店の五氏のお名前が載っている。

当時一般的に問屋又は社名で呼び、△(やまいち)と言えは古銅屋工、◎(まるき)と言えは紀伊國屋三谷本店を指した。

一つの例として銅鉄を

問はず金属業界に多くの人材を輩出した大店の紀伊國屋を取り上げてみる。

一番番頭の浅井半七さんが独立して主大様から一番番頭だから◎を一頂き開業を飾り、借用も高まった。

その浅井さんから出た方々に◎す竹内・◎下推の問谷等、いずれ機会をみて書きたいもの。

横青木(秋山表さんは)この出身。◎野崎栄蔵(○)の出身者。田中商店の職(○)の出身者に藤川・抽指・矢口・米山富次郎・鈴木新助さん等

一方、浅井さんの弟弟には梅岡正吉・石川徳次郎・豊島巳之助・鈴木恒太郎・酒井喜七さん等がおられ、現には現在神田駅前で盛業中の保志場孝松さん等多士落着。

このように紀伊國屋だけでも子・孫・曾孫・玄孫店まであるが、一方、統制中廢業を余儀なくされ又戦災を被ったり、後継者難などで商權を諸社等に譲り、社名は残ったものの中身が全然違う店もある。それも時代の流

當時大東亞通商周辺には大店が軒を並べていた。因三角大三の三崎・利の梅岡・金山炭の浅井・余の問谷等、いずれ機会をみて書きたいもの。

私事で恐縮だが、生家

で子供の頃から岩井橋で梅岡さんその他の荷役作業を見て育ち、長じて伸銅品の関口へ入り、生家の鉄と問方の勉勵が出来た事は良かったと思っている。

昔は銅鉄併営が多く組合も一緒のときもあり、今でも地方へ行くと銅鉄商の看板を見ることがある。

なぜ取扱量の少ない銅を先に書き鉄を後に書くのだろうか。

金と同じと書く銅に敬意を添え、金を失うと書く鉄を卑下してか、鉄を上に乗くと鉄道省(現運輸省)と通商が一緒なので通達したのか。

単例の社名はワープロで私が打てる丸とか角に止めた次第です。資料が古く判読不明の箇所もあり、誤りはお許し下さい。

(関口富美雄商店社長)

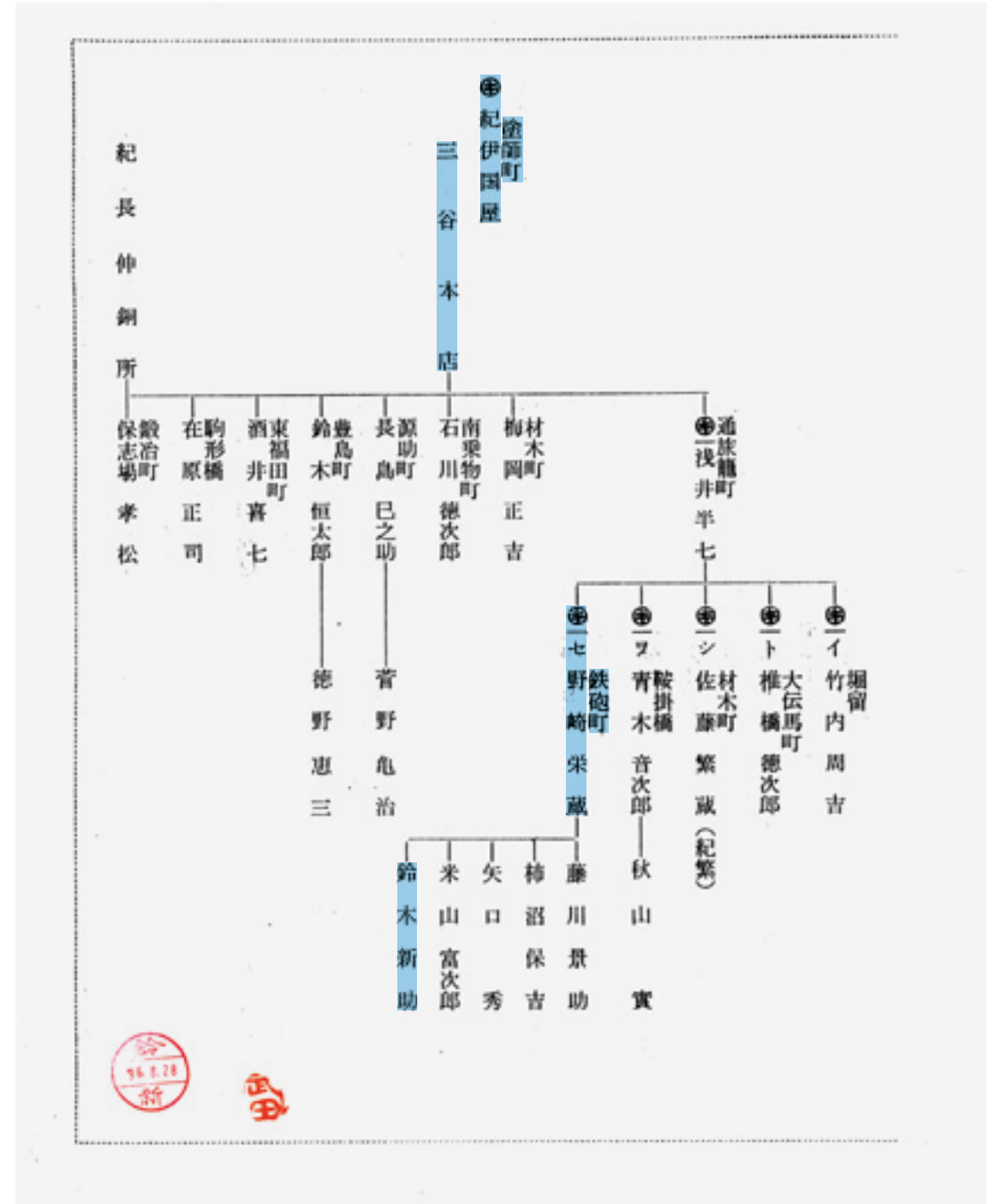
屋号 関口 務

上野半兵衛・久保山清七

保志場 孝松

鐵鋼新聞

1995.12.13



前ページの記事にホチキス止めされていた資料

□「三谷本店」



昭和初め頃の株式会社三谷本店（保志場宏氏所蔵）

神田の代表的な大店「紀伊国屋 三谷本店」（後に「株式会社三谷本店」）の写真がweb上にあり、当時が偲ばれる。

三谷本店は紀州出身の紀伊国屋三谷家十代目の当主、三谷長三郎によって名乗られたのだが、“紀伊国屋”と言えば、紀州から蜜柑船に乗って江戸へやってきて、材木商として巨額の財をなした紀伊国屋文左衛門（1669～1734）の立志伝を想像する人も多いに違いないが、この三谷家は万治3年（1660）、神田塗師（ぬし）町（現在の鍛冶町2丁目）で創業したということから、なんと、文左衛門よりも以前に“紀伊国屋”を名乗っていたのである。

釘鉄銅物問屋「紀伊国屋」として、江戸時代には主に銅の仲買を、明治以降は深川などに

工場を構えて銅・真鍮材などの非鉄関連製品の製造、販売を行う近代企業として、戦前まで存続した。

千代田区立四番町歴史民俗資料館は、三谷家から寄贈、寄託された資料（区の有形文化財に指定）をもとに、平成16年（2004）11月22日から平成17年（2005）1月16日まで、特別展「神田伸銅物語—紀伊国屋三谷家とその時代—」を開催した。同家に伝来した店の帳簿や商売道具、八代目当主の多彩な文化活動（幕末錦絵のパトロンとしても知られる）を知ることのできる美術品や、千代田区内小学校への寄付など活発な社会事業を行ったことで知られる十代目当主（胸像が神田明神裏の宮本公園内にある）の活動を展示し、江戸前期から昭和初期に至る商家がたどった軌跡を紹介した。

「店附勘定帳」という同家の帳簿は八代目が家を継いだ天保12年（1841）～嘉永6年（1853）の13年間を収録している。各決算期（正月末、七月末）に記載されている内容は、おおよそ在庫、京都・大阪の取引先の貸借高、売掛金、売上高、その他に大別でき、現代の貸借対照表（BS）によく似ている。在庫は品目ごとに記載されていて、銅・鉄・錫・鉛・真鍮の他、様々な見慣れない金属の名前が見える。その他に、針金・釘・鋳・真鍮板・銅板・鋳・錠などの金属加工品も多く、幅広く金物全般を取り扱う問屋であったことがわかる。年間の売上高も当初は1万両ほどだったのが、嘉永頃には2万両近くに伸びている。嘉永6年（1853）6月にペリーが浦賀に現れ、日本が開国すると、紀伊国屋は銅や

真鍮の輸出でさらに財を蓄えていく。神田明神の氏子町にあたる神田塗師町の豪商として、毎年18両2分を祭礼費用にも積み立てていた。「店附勘定帳」は近代の足音が迫る神田の豪商の台所事情を伝えている。

詳しくは千代田区教育委員会が『ある商家の軌跡—紀伊国屋三谷家資料報告書』として調査報告書にまとめて、市販している。（1,000円）

江東区白河には「紀長伸銅所」（P5表左上参照）の赤レンガ工場があった。明治33年（1901）に建てられた「紀伊国屋三谷本店 深川工場」が前身で、銅製品を作る工場であった。平成14年に取り壊され、跡地にはマンションが建った。Web上で当時の姿を見ることができる。



紀長伸銅所（平成12年撮影）

□ 鎌倉橋・竜閑橋

鎌倉橋や、竜閑橋界隈は東京湾からの水運を中心に材木、石材、米、醤油などの物品が流通して賑わっていた。

また、日本橋や神田界隈には「伊勢〇〇」と屋号に付いた店が多いことに気付かされる。

江戸の商業は特に伊勢、近江、松阪、紀州等の商人に負うところが大きい。今でも屋号や町名をたどると、全国から多くの商人が江戸に集まり、商売を営み、賑わったようで大変興味深い。

「にんべん」は伊勢商人を代表する鯉節問屋であり、日本橋川の水運を利用していた。

鈴新の営業部は平成7年（1995）に、創業の地、宝町（現、京橋）から、鎌倉橋交差点近くの内神田に移転したが、このようにルーツをたどると、また引き寄せられて戻ったかのような、何か不思議な縁を感じる。土地には目に見えない力があるかのようだ。

鎌倉橋は大正12年(1923)関東大震災後に復興された橋で、昭和4年(1929)の架橋である。

天正18年(1590)、徳川家康は、豊臣秀吉の命により、関東二百四十万石の領主として江戸城に入った。当時の城は、室町時代の武将太田道灌が築いた城塞を、後北条氏が整備しただけの粗末なものであった。慶長8年(1603)、関ヶ原の戦いを経て、征夷大將軍になった家康は、江戸に幕府を開き、町の整備と併せて、以後三代に渡る城の普請に乗り出す。家康入城の頃から、この付近の河岸には多くの材木、石材が相模国(現在の神奈川県)から運び込まれ、鎌倉から来た材木商たちが築城に使う建築部材を取り仕切っていた。そのため、荷揚げ場が「鎌倉河岸」と呼ばれ、それに隣接する町が鎌倉町と名付けられたという。明暦3年(1657)の『新添江戸之図』には既に「かまくら丁」の名が記載されている。

日本橋川に沿った鎌倉河岸は物の往来がずいぶん活発な場所であった。その賑わいを物語るように、鎌倉河岸の一端である神田橋交差点に「物揚げ場跡」の重厚な石碑が横たわっている。平成22年(2010)6月現在、NHKTVでは、多くの町人が住んでいた鎌倉河岸界隈を舞台にした佐伯泰英作のドラマ「まっつぐ〜鎌倉河岸捕物控〜」を放映中である。当時、鎌倉町にあっ

た「豊島屋」(現在でも猿樂町で営業、創業410余年)という酒問屋が白酒で繁盛したことは、江戸時代後期(天保期)に刊行された『江戸名所図会』が伝える有名な話であるが、その主人には竹中直人が扮している。現在の鎌倉橋も映像で流れるが、最近、モーターボートでの日本橋川等の運河巡りも盛んで、高速道路の下にあるものの、車のない時代の水運の様子を想像できる。鎌倉河岸という地名は現在はビル名で残り、書店のあるあたりが豊島屋跡と言われている。また、「出世不動尊」は、一ツ橋徳川水戸家の表鬼門除けとして祀られた。今でも全長400m以上の出世不動通り商店会として加護を受け、この小さな社を中心に歴史の古い商店、卸売業者、企業が多い。

□ 野崎栄蔵商店

野崎栄蔵商店は明治21年(1888)に創業、鉄砲町(現、日本橋本町)に所在した。当時、東京一の亜鉛鉄板、釘、鉄より線、鋼線、針金などの鉄鋼二次製品の卸売会社として、社業は栄えた。

写真は野崎栄蔵商店、創業85周年の記念品である。㊦屋号がくっきり刻印されている。岩手の岩鑄製と刻印がある。岩鑄は明治35年(1902)創業で、現在でも伝統工芸品南部鉄器で有名な盛岡のトップメーカーである。



表



裏

三代目、野崎豊男氏は大正8年(1919)11月3日のお生まれで、現在92歳。先代、鈴木新助とは一緒に良くゴルフへ出かけた。東部線材製品卸商業組合の名誉理事長等を今でもお勤めで二代目社長の鈴木猛をあたたく見守ってくださいている。

また、その下部組織、同じ鉄鋼製品卸売業の後継者の集まり「新声会」も組織されて、経営学の勉強や交流を通じて切磋琢磨している。新声会のメンバーは同じ神田・日本橋界隈の二代目経営者が多い。

新助は同じ野崎栄蔵商店出身の米山富次

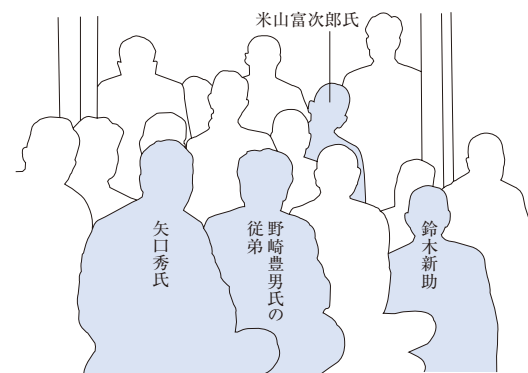
郎氏、矢口秀氏と長く交流を続けた。

㈱米山富次郎商店は、鈴新神田事務所近くの竜閑橋交差点で現在も事業を継続し、二代目の米山耕右氏は、鎌倉町町会長として地域のために貢献されており、同じ町内会で、ご近所付き合いをさせていただいている。

矢口秀氏は矢口商店を昭和8年(1933)に建築金物業として創業。後、矢口産業㈱として東神田に所在。現在はケンテック㈱として二代目に引き継がれている。



野崎豊男氏の従弟、米山富次郎氏、矢口秀氏、新助が一緒に写真がアルバムに残されている



「新声会」後の懇親会の折の野崎豊男氏(左)と鈴木猛、米山耕右氏と鈴木猛(右)(2010.4.2.)

II 創業者 鈴木新助 ～受け継ぐべき始祖の魂～



豊かに栄えた野崎栄蔵商店で修業の後、自信を持って独立した頃の若き日の鈴木新助

1) その人生と鈴木新

□ 生い立ち

創業者、鈴木新助は明治40年(1911)2月22日千葉県印旛郡佐倉町内弥勒町(現、佐倉市弥勒町)で、父・道太郎、母・くにの次男(長男は幼く病死、戸籍には三男とある)として生まれた。

当時、生家は筆筒製造・販売業であったため、金具を東京の野崎栄蔵商店から仕入れていた。

小さいときから賢く、手先も器用であったため、飛行機の模型を作って中学校の展覧会に出品し

誉められたという。しかし家は貧しかったので靴が買えず、靴をタイヤのチューブと家業の店先にあったゴム糊で作り、ゴム糊を全部使ったことでずいぶん親に怒られたと小さいときのエピソードとしてよく話していた。

佐倉市は幕末の佐倉藩主・堀田正睦(1810～1864)で知られている(NHK大河ドラマ、「篤姫」にも登場)。幕府の老中首座としてアメリカ総領事ハリスと交渉、日米通商条約の幕府側責

任者として調印に尽力した。蘭医学の採用や西洋兵法の導入、農政の刷新など、数々の藩政改革を実施した開明的藩主として知られる。今でも堀田邸は当時の面影を残して、一般に公開されている。また、順天堂を開いた佐藤泰然(1804～1872)も天保14年(1843)に江戸から移り、病院兼蘭学医学塾を開業した。新助の生家から数分のところに記念館がある。その記念館のある通りは蘭学通りと名付けられている。津田梅子(1864～1929)を日本初の女子留学生としてアメリカに送った父、津田仙も佐倉藩出身の農学者である。幼少年時代を過ごした佐倉市の先進性は新助に大きな影響を及ぼしたに違いない。

□ 奉 公

新助の父は筆筒製造業から金物屋を併業するようになった。(現在でも新助の甥・鈴木博(佐倉市商工会議所会頭)が社長で営業)

大正12年(1924)の関東大震災では佐倉市からでも東京の方が赤く見えたという。

長男・忠次郎は跡取りに徹し、弟に学問を譲り、新助は旧制佐倉中学校(現、千葉県立佐倉高等学校)を卒業。筆筒の金具で縁のあった合資会社 野崎栄蔵商店で丁稚奉公をするために震災後の大正13年(1925)、17歳で上京した。野崎栄蔵氏宅の玄関3畳間に住みこみ奉公であったと聞く。時折もらう小遣いで浅草などに遊びに出かけ、大黒屋の天井や、駒形のどじょうなどを食べたようである。

昭和初期に水道橋の村田簿記(明治42年(1909)に創設、大正10年(1921)開校)に通わせてもらっている。会社の簿記関係に従事した後、営業関係に移行し、得意先回りを受け持つ。

□ 結婚・独立

10余年ほど奉公した後、そろそろ結婚を考え

た新助は、印旛郡安食町酒直の地主であった後藤家の二女・とし(明治44年(1911)1月10日生まれ)と結婚し、独立することになる。新助の実家は佐倉の城下町(敵の追っ手の目をくらませるようなかぎの字になった道が今も残る)に位置し、成田山への街道沿いにあり、いろいろな情報が行き来していた。印旛沼近くの後藤家に年頃の娘が居るとの情報で、新助はお見合いに出かけたに違いない。長靴を履いて貰いに行ったと聞いている。

昭和9年～10年頃(届出は昭和11年)に結婚し、夫婦でまずは神田の多町あたりに暮らしたようである。その後、宝町(現、京橋)に小さな貸家があるとの情報を受け、「お前は神田ではないとここで開業しなさい」と野崎栄蔵氏に言われていたので、宝町(現、京橋)に引っ越した。奥行き4間×間口2間の貸家で二階が居住用であった。

野崎栄蔵商店から、得意先の高砂ゴム工業(株)、池田製針所、日本蓄針製作所(高田馬場、現、オーム(株))の3社を分けていただいた。昭和10年(1935)10月1日、鈴木新助商店として新助28歳の時、宝町(現、京橋)で創業した。

その年、弟の鈴木莊六(後、専務取締役)が入社。リヤカー付き自転車などで、重い鋼線や針金、釘を配達したようである。晩年、王子にある池田製針所に行くために、飛鳥山の坂がきつかったと、よく話をしていた。王子に近い板橋に所在した磨棒鋼のメーカー、榎本製線工場(現、城北伸鉄(株) 創業昭和4年(1929))はこの頃からの仕入先である。

蓄音機用針の材料の錆落としなど仕事を終え、銭湯の帰りに店の向かいにあった八重洲軒というミルクホールに寄るのが楽しみだったようである。

□京 橋



① 写真(昭和36年(1961)撮影)のように、京橋と銀座の境に、江戸城築城の折に石材等の荷揚げ場として開削された運河の一つである京橋川があった。現在は首都高速道路建設のために埋め立てられ、橋も撤去されている(毎日新聞社提供)

② 新助が創業の地となった京橋のたもとで撮った昭和11年(1936)頃と思われる写真がある

③ 江戸時代に日本橋を出発して、東海道を京都へ上るときの最初の橋なので京橋と名づけられたという説がある。テアトル東京(現、テアトル銀座)の前に1本で昭和62年(1987)に記念碑として再設置された



昭和11年(1936)10月に長男・明が生まれた。

武田忠(後、取締役)が、佐倉の鈴木金物店の紹介で入社。

戦前、リヤカーが多かった時代に、業界ではいち早くダットサントラック(当時1台1,500円位)を購入。日産自動車のセールスマン、岸田貫一氏(後、東洋電気通信工業(株)の創業社長)と出合った。そのお陰で、東電通(株)(後に一部上場、電電公社(現、NTT)の一級工事店)との

取引が始まり、優良取引先となった。

第二次世界大戦が勃発した昭和14年(1939)、合資会社 鈴木新助商店を設立した。

長女・恵子が生まれた昭和14年(1939)5月から1年後の昭和15年(1940)4月、実家の佐倉市と東京の中間地点の船橋市に350坪余の広い庭付きの居宅を思い切って購入し、引越をした。(当時1万円であったと言われる)



① 中央:新助に抱かれていたのは長男・明。右隣には弟・莊六

② 店先で遊ぶ幼い明

③ 東洋製綱(株)(後に東京製綱(株)と合併)特約販売店と写真にある





仕事机にて

□ 軍需景気

その後、昭和16年(1941)10月に次女・博子が、太平洋戦争末期の昭和20年(1945)4月に次男・猛(現社長)が生まれた。

軍需景気で、海軍の燃料輸送用のホースに巻く異型線をはじめとして、針金、釘、ワイヤーロープ、鉄線の販売、航空機のプロペラ用軸受け、防毒マスクの研究やプレス加工工場の経営、自家用巻き線機の製作などを手がけ、多忙であった。

得意先は、櫻護謨(株)、横浜ゴム(株)、三菱重工業(株)、(株)日立製作所等。

昭和58年(1983)に、創業からのことを回顧して、手書きで便箋に30枚ほどであるが、新助の弟・莊六が書き残した手記によると、

「当時、兄・新助の方針も小資本のため、売掛金の回収の早い得意先に絞った。昭和12年頃、たまたま店先に立ち寄った櫻護謨(株)の購買担当者の縁で、軍の需要も増えてきて、鋼線のポビン巻きを作るために、毎日「夜なべ」の連続。出来上がったものは翌日櫻護謨さんに届けられ、直ちに使用される。櫻護謨さんの方から翌朝、車で取りに来られることも度々あった。夜9時半頃になると、お菓子とお茶で一服して、さらに11時頃まで小生、武田、渡部、早川氏等で

「夜なべ」。なにしろ実に皆で良くがんばった。日米戦に備えて準備中であつたので、活況そのものである。得意先のため、ひいては国のための作業の連続であつた。あの頃は実に苦しいが楽しかった。不況の現在と比べて、また「夜なべ」をやるような時代がいつ来るのだろうか、感慨深い思い出である。」と記されている。

また、「軍需産業は日を追って盛況を極め、原料の少ない日本は資源の有効利用のため軍の割り当て証明書が発行されるようになった。しかし軍の証明書があっても品物が手に入らないことがあった。幸い当社は当時既に合資会社になっており、石川久次郎商店(後、興国鋼線索)、東京亜鉛メッキ、昭和鋼線(株)(現、東鋼業(株))等との取引があり、常に買掛金は毎月支払日にきちんと持参していた。その関係からかもしれないが、メーカーは当社によく材料を回してくれた。」とある。

戦時中、新助は補充兵として召集され、市川の連隊、穴掘部隊へ配属で食料調達係等として従軍した。長女のみ、妻・としの実家に疎開をした。

新助は子煩悩で、仕事も教育も人脈を大事にし、熱心であった。

□ 株式会社設立

昭和20年(1945)の東京空襲で宝町(現、京橋)にあった社屋は焼失し、金庫だけが残った。第二次世界大戦は終わり、昭和22年(1947)、借地であった宝町(現、京橋)の土地

を、地主の濱口地所部(現、ヤマサ醤油)から買い取り、トタン葺き木造2階建ての社屋を建て、昭和23年(1948)株式会社鈴木新助商店を設立した。(資本金100万円)



新助の弟・莊六に抱かれているのは現社長の鈴木猛(3才頃)

□ ゴルフ

昭和25年(1950)は朝鮮戦争の影響で日本は特需景気であった。

新助はこの頃よりゴルフを始めた。新助はシト

ロエンを購入、運転手付きで、時折佐倉に帰省し、実家の甥達を驚かせた。



この頃はよく箱根へ行っていたようである

□ 社員旅行

会社では、社員とその家族と一緒に家族旅行を実施。その後、昭和の終わりの頃まで、社員旅行を続けた。



④バスで家族も一緒に旅行を楽しんだ

⑤「家族慰安会で筑波山へ。出発前に屋上でパチリ!!」とコメントされている



①②③昭和23・24年に社員旅行をしていたことに驚かされる。奉行先の野崎栄蔵商店が昭和初期に既に社員旅行を実施していたようである

□ 出合いを大切に

戦地から戻った中島正次、井原幸（共に後、取締役）が入社し、それぞれ経理と総務を担当して財務は充実した。

昭和28年（1953）札幌営業所を開設。しかし、1年半後に閉鎖。（後、平成10年（1998）～16年（2004）にも縁あって函館出張所を開設したことがある）

東洋製綱（株）（昭和39年（1964）に東京製綱（株）と合併）の代理店、三鋼社の東京責任者であった椎津喜三郎氏（後、常務取締役）との出会いから、手狭になった倉庫を新設するため、日本橋通3丁目（現、中央通）の三鋼社が入っていた中将湯ビル（現、ツムラ（株））の地下倉庫を借りた。50kg～80kgの鋼線、針金や樽入りの釘を2～3人で担いで運んだようである。また、椎津氏の縁で、横浜ゴム（株）のタイヤの中に入れるビードワイヤーの開発、納入が始まった。三鋼社の閉鎖により引き継いだのである。

ビードワイヤーとはタイヤの耳（ホイールにひっかかる部分の補強のため）に入れるブロンズメッキの鋼線である。東洋製綱（株）と横浜ゴム（株）が共同研究して、ようやく使用できるものが出来た。その後、テンパードワイヤー（後のホースワイヤー）、スチールコードの開発など、両社の開発、技術担当には「聞こう、頼もうと思った時には鈴木新助商店がそばに来ていた。」と言われるほど、当時の担当はちょくちょく通ったようである。

東洋製綱（株）とのコラボレーションは、トヨロックの販売、日本で初めての開発であったロックマット、タイロープなど、その後も続いた。

企業間取引の卸売業は、大きな商社との競争もあり、苦勞のないわけではなかったが、全社一丸となって、日本の高度成長期をひたすら得意先と仕入先の間に入って、その役目を果たすことに努め続けた。

新助は横浜ゴム（株）の資材部長であった内山氏とのお付き合いは公私にわたり大事にした。

社員であった椎津氏の居宅を晩年になっても訪れるなど、末永い交流を続けた。

古河電工（株）、王子製紙（株）等、新助は臆することなく人脈を通じ大会社とのつながりを構築して行なった。また大きな企業と付き合うことで、学びも大きく、実力もついた。

新助は戦前からの仕入先、東京製綱（株）や堅川線材（株）、杉田製線（株）等と常日頃感謝の気持ちを持ち、何十年というお付き合いを続けた。

ワイヤーロープでは（株）ホリウチ、綱豊産業（株）等、現在でも大変お世話になっている。

東洋製綱（株）（その後、東京製綱（株）と合併）の代理店会、「東代会」（後、東綱会）の会長としてメーカー、代理店間の親睦に努めたり、東洋製綱（株）と東京製綱（株）の合併後も「東京東綱会」「全国東綱会」の会長の任に当たり、メーカーと代理店の間の絆をより強化した。



新助 最前列の向かって右から5人目。猛（現社長）は後列2段目の向かって右から8人目に写っている

□箱崎倉庫

昭和31年(1956)～昭和39年(1964)頃までは宝町(現、京橋)の事務所の裏通りに倉庫があった。取り扱い商品は針金、釘、トタン板、なまし線、磨き丸、磨き六角、より線、ワイヤーロープ、ドリルロット等。なまし線は乱貫で30kgから80kg、釘は樽入りで60kgあった。戦後、配達はリヤカーや自転車を使っていたが、配達用にミゼットを購入。倉庫担当であった高野富夫も免許をとった。

「昭和36年(1960)、箱崎倉庫を取得したことで、商品も増え、仕事の量も増え、針金、なま

し、より線などは4,000kg～10,000kg単位で入るようになった。電電公社(現、NTT)向けのより線の発注が多かった。(株)明電舎にホイストロープが大量に出た。得意先は富士電機(株)、東芝タービン、(株)芝浦製作所、(株)小松製作所、三菱丸子、三菱川崎、東洋電機製造(株)。あらたに取引が始まったのは、エヌエスケー・ワーナー(株)、日本ラインツ(株)等。」(親子二代に渡って倉庫で勤務した高野富夫の手記より)

箱崎倉庫へは新助は毎月必ず顔を出していたようだ。



鈴新(株)箱崎倉庫
日本橋箱崎町41
昭和61年(1986)8月
(Webで紹介されている)

写真は当時の箱崎倉庫と内部



箱崎も東京湾から江戸に入る運河を利用した物流の拠点であった。今でも水天宮あたりや人形町や蛸殻町などは江戸情緒が残る。

箱崎倉庫があったあたりに、NHK大河ドラマの「龍馬伝」に登場する山内容堂の屋敷があった。「はごぎき新聞」が発行した『東京・日本橋「偲ぶ、箱崎町」』によると、幕末に徳川御三卿の一つ田安家が1万3千坪の土地と屋敷を拝領していた。箱崎八景と呼ぶほどの庭園があ

り、幕府崩壊後は明治初年に土佐高知の山内容堂氏が譲り受けた。その後、山内容堂氏が明治38年(1905)に箱崎町と蛸殻町の間に土洲橋(地図参照)を自費で架け、明治42年(1909)に東京市に寄贈。やがて名園もつぶされ、河岸に沿ったところに日本郵船の倉庫(今の読売ビルあたり)が建った。土洲橋も昭和45年(1970)に箱崎川の埋め立てにより撤去されたとのことである。



昭和35年～40年頃の箱崎

□八潮市に倉庫を移転

箱崎倉庫は上野兵松ガラス問屋(現、上野ガラス(株))の倉庫として建設されたもので、内壁は板で張り巡らされていた。裏が運河となっていたため、船着き場から物資を運び入れる入口があった。

昭和47年(1972)、首都高速道路6号線建設によって、江戸時代より運河の機能を果たしてきた箱崎川も時代の流れに逆らえず、400年の歴史に幕を閉じて埋め立てられた。今は箱崎シティエアターミナルとなっている。

隣の木造倉庫も取得し、併せて120坪あった

が、いよいよ老朽化、倉庫前の道路も狭く10トン車が入れないなど問題があり、平成11年(1999)5月、八潮市中央に倉庫を移した。

運河を利用した倉庫群の一角で、小樽等のガラス倉庫に良く似た建築物であった。老朽化しても建て替えなかったのが、レトロ建築物の愛好家にWebで紹介され、そのレトロさに目をつけた「劇団第七病棟」(石橋蓮司主催の劇団)が唐十郎の作品を上演する劇場等に変貌したが、今は売却され、マンションとなっている。

□宝 町

昭和39年(1964)、北海道拓殖銀行から同じ宝町(現、京橋)にビルを建てるので、それまでのつなぎとして土地を貸して欲しいとの話が舞い込んだ。営業部は一つ路地を入った地上権だけ持ち、倉庫として貸していた3階建ての

ビルに入った。やがて銀行の仮営業所が建ち、昭和43年(1968)まで貸すことになった。

宝町の町名は昭和53年(1978)に住居表示変更で京橋となった。



屋上に北海道拓殖銀行の看板があった

次男・猛が入社した昭和43年(1968)頃、ちょうど北海道拓殖銀行がぬり彦ビルの方へ移転したので、(株)鈴木新助商店はそっくりそのビル

をもらい受けることになった。大きな銀行用の金庫はそのまま使用した。建築費などを考えると、運の良いことであった。



(株)鈴木新助商店の看板(袖看板を再利用)



1Fには商品が案内されていた。立っているのは猛(現社長)

□「鈴木新株式会社」に商号変更

このころ新助は注射器でC型肝炎にかかり、毎日ミノファージェンを飲み、週一回病院で注射を打たねばならない生活となった。一病息災で、それからは健康に気をつけて昼食にサラダを持参する生活を続けた。

昭和50年(1975)に次男・猛が結婚、翌昭和51年(1976)に初の内孫・新吉が生まれた。

昭和55年(1980)には娘婿・多田守男が入社した。昭和56年(1981)、商号を鈴木新助商店から鈴木新株式会社に変更。続いて、昭和57

(1982)年に次男・猛は社長となり、新助は会長となった。

また、昭和54年(1979)には鷹の台カンツリー倶楽部でホールインワンを達成し、記念品としてペーパーナイフを配り祝った。新助は昭和30年(1955)に入会した鷹の台カンツリー倶楽部のメンバーであることをとても誇りに思い、大事に思っていた。休日の土曜日は庭で練習をし、日曜日には必ずと言ってもよいほど倶楽部に通って健康的な生活に努めた。



野崎豊男氏 弟・莊六 鈴木新助



写真の日付は1995年、新助88歳。90歳近くまで、ゴルフを楽しんだ

□京橋YSビル建設

会社ではかねてから、自用倉庫を建設したいと考えていた。三郷インターチェンジの近くに500坪の売り地の話があったので、鶴見に所有していた土地と交換し簿価を圧縮して平成元年(1989)に購入したが、調整区域であったため、使用できるようになった頃(平成19年(2007)4月)には、開発費用分が減歩されて300坪になってしまった。晩年、新助は「若い人たちのやったことは失敗が多い。」と言っていた。現在は駐車場として賃貸している。

同じく昭和の終わり頃、京橋の隣で事業を営む吉川紙商事(株)が、中央信託銀行がテナントとして入る条件で、一緒にビルを建設しないかと話を持ちかけて来た。何回かの話し合いの後

に、一緒に共同ビルを建設することになった。割合は所有の土地の面積に比して、吉川紙商事(株)が7、鈴木新が3である。平成2年(1990)、本社地に京橋YSビルが竣工した。地下1階、地上9階の鉄筋コンクリート造りである。設計は(株)日本設計、清水建設(株)と戸田建設(株)のジョイントベンチャーであった。吉川紙商事(株)と一緒に管理会社YS興産を作り、9階は吉川紙商事(株)との持分割合で自己使用した。こうして不動産賃貸事業が鈴木新の事業に加わることとなった。総務部が9Fに入り、ビルの裏側に位置した営業部事務所と2ヶ所で事業を継続した。



平成2年(1990)6月、創業の地に京橋YSビル竣工

京橋YSビルの当初の収益は大きいものであった。その頃、元第一勧業銀行の小林順一氏との付き合いが深まり、新助と一緒に金貨の会社を経営したこともあった。また小林氏の友人の公認会計士・五領田元男氏を紹介され、何かと経営の相談をした。五領田顧問会計士には二代に渡って会社の運営について大変お世話になった。今は、その弟子の神郡尙会計士に引き継がれている。



弟・莊六はいつでも新助の隣に写っている

□内神田へ

中央信託銀行(現、中央三井信託銀行)は京橋YSビルを20年間借りてくださる予定であったが、10年目で、三田に大きな自社ビルを建てて移転してしまわれた。

平成8年(1996)には京橋YSビルの裏の営業事務所ビルが地上げに会い、代替として内神田と京橋を紹介されたが、内神田を選択し、営業部は内神田(現住所)に移転することになった。その後、YSビル自用部分も賃貸し、平成15年(2003)には総務部も内神田に移転し、営業部と統合して今日まで鈴新は内神田で事業を続けている。

平成8年(1996)、鷹の台カンツリー倶楽部より、銀座天賞堂製の卒寿祝いの鳩杖を贈られた。それは新助にとってこの上ない喜びであった。

90歳を超えて、徐々に肝臓が衰え、ついに平成10年(1998)10月17日、一ヶ月の入院の後に永眠。92歳であった。現役(相談役)のまま創業から鈴新のために尽くし通した一生であった。鈴木家との合同葬ということで、しめやかに葬儀は行われ、「大徳院長榮日新居士」という戒名をいただいた。晩年、信心深い新助は山号額や寺銘石等を菩提寺に奉納していた。



①② 妙経寺山号額「長榮山」奉納記念
平成7年(1995)2月

③ 日蓮聖人立教開宗750年記念事業にて寺銘石「妙経寺」を奉納
平成9年(1997)



妻のとしも新助の没後の平成13年(2001)3月9日、新助を追う様に脳梗塞で永眠。91歳であった。戒名は「謙徳院妙経日俊大姉」。新助を良く助け、いつも新助の一步後ろに控えているような、謙虚な良妻賢母であった。



□ 光海底ケーブル

昭和57年（1982）頃、武田勉（創業から新助を助けた武田忠の長男）が担当であった日本大洋海底電線㈱（現、㈱OCC）を訪ねると、海底ケーブルの光ファイバーを包む金属の開発に悩んでいるとの情報を得た。アルミ製では深海の水圧に強度が耐えられず、また海水と反応してしまうので、鉄製での開発を秘密裡に依頼された。

日刊工業新聞紙上に掲載されていたナミテイ㈱の異形線に関する広告を目にした武田勉が、日本大洋海底電線㈱（現、㈱OCC）の要求に合う異形線の製造が出来るかとひらめき、昭和59年（1984）7月、秘密裡にナミテイ㈱の村尾雅嗣社長に電話で開発・製造を依頼した。

村尾社長はじめ同社の社員が日々徹夜をするご苦勞の末、昭和61年（1986）、見事長尺の三分割個片の開発に成功された。二代目の社長、村尾雅嗣氏によって「光海底ケーブル用3分割個片の開発秘話」にその折の詳細は記述されている。（ナミテイ㈱は創業65周年をお迎えになられ、詳細を社史にも記載なさっている。）

昭和50年の終わりから60年にかけての海底ケーブルの光ファイバーを包む三分割個片の開発は、「鈴新のビジネスとはただ単に商品を流すだけの商社ではない。時代の先を読み、顧客と新商品を共同開発し、ビジネスに発展させていくのが鈴新流のビジネスである」という理念を反映した、前述のビードワイヤーと並ぶ成功事例のひとつである。

この成功には新助も喜び、武田勉に新助の船橋カントリー倶楽部の名義を書き換えて与える程であった。

以来、鈴新はこの光海底ケーブルの資材の納入業者として活躍することになる。次第に㈱OCCとの関係も深まり、平成12年（2000）、「鈴

新㈱の株式を持ちたい」と㈱OCCより要請があり、第三者割当を実施し、昭和55年（1980）に3,200万円になっていた資本金は6,600万円に増額となった。

ところで、新助は取引を大事にしようとお付き合いのある上場株を会社でも個人でも所有した。長く持っていたので、配当の恩恵も受け大事に手帳につけていた。そのメモは今でも残っている。増資などで株数など次第に増え、簿価が安価であったため、鈴新の経営危機に際しては売却益が救ってくれた。日経平均株価が1万円を割った平成22年（2010）6月の現在でも、簿価が安価なため含み益がある。新助の戦前からの努力は今でも会社を大きく助けてくれている。

□ 近 況

平成16年（2004）から京橋YSビルは東京建物㈱に管理を依頼し、不動産賃貸業を続けている。

平成18年（2006）、日立建機㈱のグリーン調達の要請から環境認証KES（KES・環境マネジメントシステム・スタンダード）を取得。その後社内で環境委員会を組織し、毎年認証を更新している。KESはISO14001のような国際規格に比して、中小企業向けの環境認証である。地球温暖化防止京都会議・COP3が京都市で平成9年（1997）年に開催されたことがきっかけで、平成13年（2001）「京のアジェンダ21フォーラム」が考案。平成19年（2007）からは「特定非営利活動法人 KES環境機構」に引き継いで運営されている。

このように環境問題に取り組み、是非、環境関係の事業を作っていきたいという願いから、平成22年（2010）6月には第三営業部を新設、環境・エネルギー関連事業にも乗り出した。

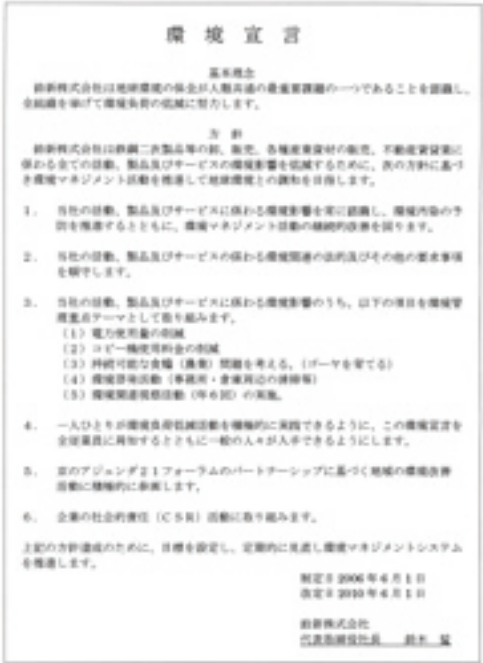


□ これからも いつまでも

平成17年（2005）は気が付けば創業70周年を迎える年であった。何も準備が出来ずに、松阪の「柳屋奉善」の「鈴最中」と四国の新米で「鈴新」とかけ、ささやかに祝った。

それから5年、大きな受注もあり、幸い不良債権もすっかり償却。平成22年（2010）10月1日、創業75年を迎えることが出来たのである。

残念ながら今まで記録がまとめられてなく、全てを書くことはできないが、75年を振り返ってわかることだけでも綴ってみると、たくさんの気付きがある。会社の存続とは、運なのだろうか？努力なのだろうか？運を呼び込む努力なのであることにも気付かされる。これからもいつまでも気を抜くことなく努力は続けたいものである。



2) 人 柄

進取の気性に富む

写真の撮影・現像・焼付を奉公先の野崎栄蔵商店で覚えたようで、戦前からの家族等の写真が驚くほど残されている。アルバムに整理され、初期のものは自筆のコメントが写真脇に白インクで丁寧に記載されている。

ゴルフも戦後すぐに親しんだ。

愛読書は月刊誌「文藝春秋」であり、お客さんとの面談で巧みに本の内容を話題として使うと、皆がびっくりすると言っていた。勉強熱心であった。

時代を見る目は確かなものがあった。自動車が普及する前に、将来のモータリゼーション化を考え、社員全員に運転免許の取得を義務付けることもあった。

将来営業には英会話が絶対に必要になると社員に修得を薦めるだけでなく、自らも21世紀に生きるために欠かせないものだと考え、70歳になってから英語の勉強を始め、晩年まで英語に興味を持っていた。やがて来る国際化社会を想定したものであったと感心するほどである。

大きな会社とも取引し、人脈を大切にする

良き出会いや高度経済成長時代の運に恵まれていた。

取引に対する感謝の念は深く、本人が亡くなっても伴侶まで大切にお付き合いを続けた。

腰が低い

「うちあたりは…」が口癖。プライドや気位の高い人物ではなかった。

仕事熱心

創業者として会社の基盤を固めるため寸暇を惜しまず、日々仕事に、お付き合いに努めてきた。

家族思い・面倒見が良い

家族を叱っている姿を見たことがない。弟・莊六が残した手記には「面倒見が良い兄」と思慕が記されている。

まめで行動が早い

はがき等、書くとともに自らポストまで投函に出かけた。

信心深い

母親、くのに影響である。90歳近くまで毎年暮れには除夜の鐘が鳴る厳寒の深夜に成田山初詣に家族と共に出かけた。中学生の頃から成田山詣では彼の役であつたらしい。

毎朝、自宅の神棚に炊きたての白飯を上げてお祈りしていた。

晩年、生家の隣に位置する「妙経寺」(鈴木家の菩提寺)に本堂正面入り口に「長榮山」という山号額、門前に寺銘石を奉納。また、正座の難しい人のために、本堂の椅子等を寄進した。「妙経寺」に妻・としと共に眠っている。

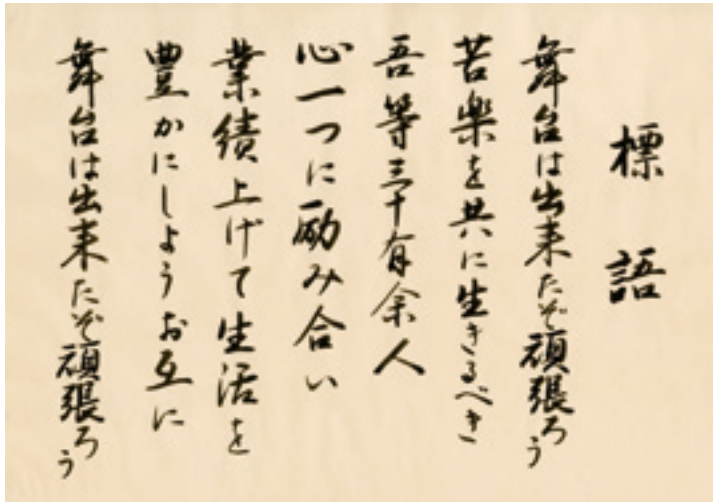
鈴木家の墓(明治初期からの墓標がある)、弟・莊六の墓、佐倉鈴木家長男で甥・隆の墓等、一族が同じ菩提寺に集まっていると誰かが花や線香を手向けてくれる。墓参に出かけた親族は墓標などからルーツを知ることが出来、一族のつながりがそのようなところからも醸成されていると御前様の奥様がおっしゃる。

3) 創業の精神

奉公の後、昭和10年(1935)に独立した新助は、ただただ一筋に働いた。戦前、戦後と“とにかく皆で食べていこう”を掲げて社員と共に社業に励んでいったに違いない。

特に現在までも残る理念や家訓は、「顧客第一、質素儉約」である。

後に、総務部長であった井原幸が次のような標語を作った。(写真)



4) 語 録

日本橋で奉公していたせいか、江戸弁であった。怒ると尻をまくるような一面もあった。

以下、記憶に残る語録を記す。

「愛される鈴新」

鈴木猛社長に「先代が良く言っていた言葉で印象に残っている言葉は?」という問いに対する答え。

「ケチではだめ」

使うべきところにはきちんと使ってお金が生きる。全く使わないようにしてはダメなのだ。

「金は体に着けてしまえ」

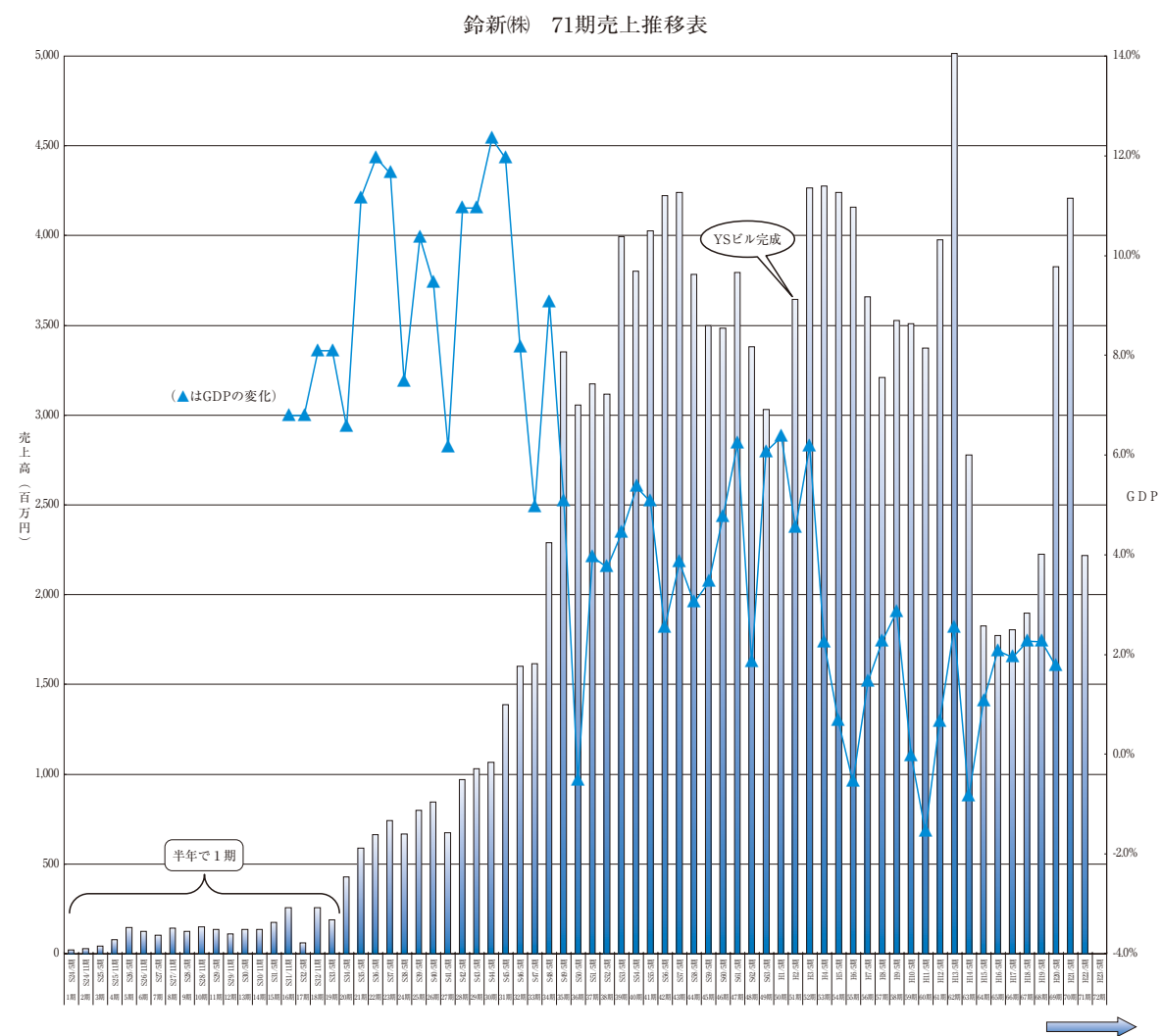
お金は貯金で持っていても有効ではない。勉強に励み、体の中に持っていれば、体を通して働くことでお金の価値以上になる。

「自分の立ち位置がわからない奴はだめだ」

人はそれぞれ自分の役目、立場がある。立場を見誤って出過ぎたり、高望みしたりすると、人に疎んじられたり、嫌われたりする。しっかり自分の位置を自覚して、役に立てるように歩むことが大切。また自分の足場をきちんとこなすことで、次のステップが開ける。他人からの評価は後からついてくる。自分の努力は誰かがきちんと見てくれている。

III 鈴新の売り上げの変遷 ～数字で見る鈴新の歩み～

決算書は昭和23年(1948)からほとんど現存している。



IV 人員の変化 ～小さくてもきらりと光る～

社内に現存している名簿で判明するのは役員・社員、合わせて156人であることから、この75年間にかわった人員は、200人ほどと想像できる。

現在、役員含めて社員数は25名であるが、

最大の時期でも40名くらいであった。先代は「うちあたりは…」というのが口癖で、二代目も拡大思考は持っていない。分相応、小さくてもきらりと光る会社を目指している。

V これからの鈴新 ～末永く、しなやかに～

ーレコード針から始まったー

野崎栄蔵商店からのれん分けしていただいたのは、高砂ゴム工業(株)、池田製針所、日本蓄針製作所(現、オーム(株))の3社であった。

鈴新が創立当初より単なる線材ではなく、ニッチな付加価値を持った製品、優位性を持っている商品にこだわるのは、この出発点に起因している。

レコード針を続けていたのでは、到底今日を迎えられなかったであろう。お得意先に要請されるものをメーカーと共に開発、対応してきた。事業のルーツは現在の事業の内容に大いに関連している。会社の風土、文化、伝統というのは、会社の生き立ちが大きく影響する。

創業は易く、守成は難し。

古い中国の諺である。出典は『貞観政要(じょうがんせいよう)』

解釈は「新たに事業を興すよりも、それを衰えさせないように守っていくほうが難しい」

唐の太宗(たいそう)は近臣に、創業とそれを守るのとどちらが難しいのかと問うところ、魏徴(ぎちょう)という者が「創業は易く、守成は難し」と答えたという話がある。商売は生み出すことよりも、継続させ、しかも発展させる方が数段難しいということ。

振り返れば、弊社は75年間でわずか2人の社長である。

創業は難しく、守成も難しい。

弊社としては初めてまとめた拙い社史であるが一代目、二代目、どちらも大変であったことを偲ぶことができる。

問題はこれから。

戦後、日本は平和な時代が続き、長寿の企業が増え、その秘訣を探る研究が盛んである。

リーマン・ブラザーズは158年も続いた会社であった。必ずしも長寿の企業が安定企業とはいえない。長期に繁栄することの難しさを改めて思い知らされる。企業の寿命は意外に短く、大企業で40～50年に過ぎないという研究がある。日本でも会社の寿命は30年説があった。

注目されるのは、業界が同じでも、企業の成長力が大きく異なるケースが多いことであろう。企業の寿命が外部環境に必ずしも支配されないことを示唆している。外部環境に合わせつつ利益を生み出していく、持続していく何か知恵なようなものが重要なのだ。感じたら“しなやか”に変化に対応できる内部要因である。社内のガバナンス力や企業風土の存在が欠かせなく、企業の命運を握っている。

■TSR(東京商工リサーチ)の発行する「TSR情報」(2009年8月～2010年6月)より

全国創業100年超え企業の実態調査によると、全国の「創業100年超え」長寿企業(個人企業、各種法人を含む)は22,507社(調査時点は平成22年(2010)5月)で、全企業データに占める構成比は1.0%であると書いている。

地区別では関東圏に集中し、またその創業年代別として、明治30年から39年までの創業が多い。この時期は多様な産業が台頭し創業した、「明治後期から大正モダンへの過渡期の時代」であった。

売上高別では年商5億円未満が6割を占める（近隣商圏内で事業展開する中小・零細企業がほとんどを占める）。上場企業は24社で日本を代表する大企業。

業種別社数は「卸売業、小売業」がほぼ半数を占め、続いて「製造業」、「建設業」で全体の86.2%を占める。

長寿企業が目立つ業種は旅館、酒類製造、薬品関連、菓子製造。

『「100年に一度」の世界同時不況により、行き過ぎた「利益至上」のグローバリゼーション型経営に疑問符が打たれ、これに伴い「日本型経営」の見直し機運が高まってきた。

日本型経営の長所は、創業100年超えの長寿企業で随所に見られる。具体的には、「本業を重視しながら、時代に合わせて変化する柔軟性」

「身の丈にあった経営」
「従業員重視の信頼経営」

などが挙げられるが、このほかに創業当初の家訓や社是などを保持しているところも多い。

長寿企業は地域経済の核であり、地域の多様性を維持する上で欠かせない存在でもある。先行きの不透明感が深まる中、その柔軟性としたたかさを学ぶ必要がある。』

と結んでいる。

■日経ビジネス平成21年（2009）10月12日号
特集“不滅の永続企業”より
『絶えざる「変態」が衰退を防ぐ
「会社の寿命は30年」――。

かつて本誌は、昭和58年（1983）9月19日号でこう喝破した。だが環境が激変した今、問われるのは寿命そのものよりも、環境変化を生き抜くために、自らをどう変えていくか。

絶頂にある企業も、変化を怠れば衰退への坂道を転げ落ちる。成功への未練を断ち切り、自らの姿を変える。すなわち「変態」こそが将来の永続を担保する道だ。その条件を探る』
というような見出しで始まる。

■平成21年（2009）1月23日の日経産業新聞
1面の「ものづくり現場発－東大阪に行く」より
前述の弊社取引先のメーカー、ナミテイ(株)に関する記事が掲載されている。

最後に『先代の口癖は「常に今の時代のものづくりを意識しろ。」であった。精度の高い加工技術だけでなく、需要を先読みし、新しい分野に取り組む“柔軟性”が強さを支えている』と結ばれている。

弊社も振り返れば戦争や、波のように変化する景気、多額の不良債権の発生等で、大変な時期もあった。幸いにも75周年を迎えられたが、これからのクォーターは正念場であると考え。なぜなら、経済は急速にグローバル化し、創業の頃とはすっかり時代が変化してしまっているからである。

企業は絶えず大きな変化の潮流の中に生きしており、常に現状に甘んずることなく、生まれ変わり続けることこそが、未来を創造できる条件である。

しなやかさ、柔軟さで、この未曾有の経済の荒波を、乗り越えて生きたい、乗り越えられると信じたい。

75周年の記念品は“金”を使った。金は永遠の輝きを持っていてしなやかに薄く延びる。永

遠で柔軟な経営をと願いを込めた。また記念祝賀会会場となる帝国ホテルは、本年ちょうど創業120周年を迎えられる。ここで開催できることも喜ばしく感じている。

これまで弊社に関わりのあった全ての方々、全てのステークホルダーに深い感謝の気持ちを込めて、二代の経営の気付き、学びを大切に、社員と共にしなやかに発展していきたいと祈り、終わりとしたい。

＜参考文献＞	
「千代田まち辞典」 千代田区区民生活部	平成17年（2005）3月15日発行
「神田を歩こう」 神田公園地区連合町会	平成15年（2003）3月発行
「日本橋街並みの特徴史考」 白石考 三田商学研究	平成18年（2006）2月掲載
「KANDALネッサンスSummer 2009（第24巻第1号）」 NPO法人神田学会出版部	平成21年6月25日号
「東京・日本橋 偲ぶ、箱崎町（昭和11年～15年頃）」 挟み込み地図 箱崎環境対策協議会・機関紙『箱崎新聞』刊	平成21年12月
「銀座に生まれて75年」 銀座アスター食品(株)	平成10年
「日本大洋海底電線株式会社社史」 (株)OCC HP 沿革	昭和45年（1970）10月1日発行
「古河電気工業株式会社 創業百年史」古河電気工業株式会社	平成3年（1991）9月30日発行
「光海底ケーブル用3分割個片の開発秘話」 ナミテイ(株)代表取締役 村尾雅嗣著	平成11年（1999）発行
「日経ビジネス」 不滅の永続企業	平成21年（2009）10月12日発行
「TSR情報」 株式会社東京商工リサーチ	平成21年（2009）8月14日号
「東京の地霊（ゲニウス・ロキ）」 文春文庫 鈴木博之著 手記 鈴木荘六 高野富夫	
その他、日本経済新聞、朝日新聞、HP多数	

VI

年表

創業

創業者鈴木新助と鈴新(株)年表

年号	西暦	事柄	新助年齢	猛年齢
明治40年	1907	2月22日千葉県佐倉市 鈴木道太郎、くのに次男として誕生す		
大正12年	1923		16歳	
大正13年	1924	千葉県立旧制佐倉中学校卒業(現、佐倉高等学校) 日本橋鉄砲町 野崎栄蔵商店入社 震災の折、類焼せず 当時東京一の鉄鋼製品の販売会社 佐倉の実家の金物店(前、筆筒製造・販売)は金具の取引があった 野崎宅玄関三畳間に下宿 村田簿記学校に通わせてもらう	17歳	
昭和9年	1934	印旛郡 後藤家次女・としと結婚 神田に間借りする 神田鍛冶町、多町あたりに鈴木新助商店(仮事務所)として独立の準備	27歳	
昭和10年	1935	10月1日宝町(現、京橋)に移転 鈴木新助商店として創業す 奥行四間×間口二間 事務所の二階に住む 野崎さんから得意先を3社分けていただく 高砂ゴム工業㈱ 池田製針所 日本蓄針(レコード針)製作所 鈴木荘六就職 リヤカー付き自転車で配達する	28歳	
昭和11年	1936	長男 明誕生 武田忠就職(佐倉鈴木金物店の紹介) ダットサントラック購入 岸田貫一氏(後、東電通創業社長)と出会う	29歳	
昭和14年	1939	長女・恵子誕生 合資会社 鈴木新助商店を設立	32歳	
昭和15年	1940	船橋市に住居を移す	33歳	
昭和16年	1941	次女・博子誕生 軍需景気で多忙であった 海軍の燃料輸送用のホースに巻く異型線をはじめとして、 針金、釘、ワイヤーロープ、鉄線の販売、防毒面の研究、プレス加工工場の経営、 自家用巻線機の製作を手がける	34歳	
昭和19年	1944	市川に補充兵として招集され、穴掘部隊に配属 食料係	37歳	
昭和20年	1945	東京空襲で京橋焼ける 金庫だけが残る 次男・猛誕生	38歳	0歳
昭和23年	1948	株式会社 鈴木新助商店を設立 このころGOLFを始める	41歳	3歳
昭和28年	1953	札幌営業所開設す(1年半後閉鎖す) 東洋製鋼㈱(後に東京製鋼㈱と合併)関連の椎津喜三郎氏(後、常務)との出会いから、 横浜ゴム㈱のタイヤのビードワイヤーの開発、納入始まる	46歳	8歳
昭和36年	1961	箱崎倉庫取得	54歳	16歳
昭和39年	1964	本社ビルを北海道拓殖銀行京橋支店に賃貸す(昭和43年迄)	57歳	19歳
昭和43年	1968	次男・猛 入社 本社ビルに移転 この頃C型肝炎にかかる	61歳	23歳
平成54年	1979	鷹之台カンツリー倶楽部にてホールインワン	72歳	34歳
昭和56年	1981	商号を鈴新株式会社に変更	74歳	36歳
昭和57年	1982	次男・猛 社長に就任 新助、会長となる 光海底ケーブルの開発に携わるようになる	75歳	37歳
平成元年	1989	三郷に倉庫用地取得	82歳	44歳
平成2年	1990	本社地に京橋YSビル竣工	83歳	45歳
平成6年	1994	ダイヤモンド婚式	87歳	49歳
平成7年	1995	菩提寺 佐倉市 妙経寺に山号額「長榮山」を奉納す	88歳	50歳
平成8年	1996	8月 営業部を神田事務所に移転 卒寿にて鷹の台カンツリー倶楽部より鳩杖を贈られる	89歳	51歳
平成9年	1997	日蓮聖人立教開宗750年記念事業にて寺銘石「妙経寺」を菩提寺に奉納す	90歳	52歳
平成10年	1998	10月17日 相談役 鈴木新助永眠	92歳	53歳
平成11年	1999	5月 箱崎倉庫を八潮市に移転		54歳
平成12年	2000	8月 増資により資本金6,600万円となる		55歳
平成15年	2005	3月 神田事務所に本社を統合する		60歳
平成16年	2006	10月1日 KES環境認証スタンダードステップ2取得		61歳
平成22年	2010	10月1日 創業75周年を迎える		65歳

景気の変化	社会の出来事
	八幡製鉄所創業(1901年)
	関東大震災(1923年)
	世界大恐慌始まる(1929年) 満州事変(1931年) 日産自動車ダットサンの量産開始(1934年)
	2.26事件(1936年) 盧溝橋事件(1937年)
	第二次世界大戦勃発(1939年)
	真珠湾攻撃 太平洋戦争勃発(1941年)
	B29東京上空を空襲(1994年) 第二次世界大戦終戦(1946年8月15日) 日本国憲法発布(1946年)
1ドル=360円の単一為替レート実施(1949年) 日経平均株価算出・公表開始(1950年9月7日)110円82銭 神武景気(1954年12年〜57年6月)	朝鮮戦争始まる(1950年) 皇太子ご成婚(1959年) 伊勢湾台風(ㄥ年)
岩戸景気(1958年7月〜61年12月)	ケネディ暗殺(1963年) 東海道新幹線開通・東京オリンピック開催(1964年) 山陽特殊鋼倒産(1965年) 日本の総人口1億人突破(1966年)
いざなぎ景気(1965年11月〜70年7月)	
ニクソン・ショック不況(1970年8月〜71年12月) 1ドル=308円新レート実施(1971年)	アポロ11号月面着陸(1969年) 富士製鉄・八幡製鉄合併、新日本製鉄㈱発足(1970年) 日本万国博覧会大阪で開催(1970年) 沖縄返還協定調印(1971年) 日中国交回復(1972年) 第一次石油ショック(1973年) 狂乱物価(1974年) ベトナム戦争終結(1975年)
1ドル=170円台となる(1978年)	
	第二次石油危機(1978年)
戦後最長不況(1980年3月〜83年2月) 日経平均株価初の1万円台乗せ(1984年1月9日) 円高不況(1985年7月〜86年11月) バブル景気(1986年12月〜91年2月) 日経平均株価過去最高値(1989年12月29日)38,915円87銭	日本の自動車生産台数1000万台突入(世界1位)(1980年) 東京サミット開催(1986年) 男女雇用機会均等法施行(ㄥ年) 消費税の導入(3%)(1989年)
バブル崩壊不況(1991年3月〜93年10月) 平成景気(1993年11月〜97年5月) 1ドル=100円を切る 1ドル=79円75銭(1995年)	東西ドイツ統一(1990年) ソ連邦消滅(1991年) 環境基本法成立(1993年) 阪神大震災(1995年) 地下鉄サリン事件(1995年)
金融危機不況(1997年6月〜99年1月)	消費税引き上げ(5%)(1997年) 北海道拓殖銀行破綻(ㄥ年) アジア通貨危機(1998年) 長野五輪(ㄥ年) ユーロ導入(1999年) 大手銀行に公的資金投入(ㄥ年)
米国同時多発テロで日経平均株価1万円割れ(2001年9月12日) 戦後最長好況(2002年2月〜07年10月)	金融庁発足(2000年) 米国同時多発テロ(2001年) イラク戦争勃発(2003年) 新潟中越地方地震(2004年) JR福知山線脱線事故(2005年) 愛知万博開催(ㄥ年)
リーマン・ショック不況(2007年11月〜09年3月)	
バブル後最安値7,054円98銭(2009年3月10日)	民主党が自民党に代わり政権を握る(2009年)

(平成11年(1999)10月17日作成に補足)

VII 会社概要

商 号	鈴新株式会社	事 業 所	本店：登記簿上の本店所在地
創 業	昭和10年(1935)10月1日		東京都中央区京橋1丁目12番5号 京橋YSビル
資 本 金	6,600万円		本社：神田事務所
営業品目	工業、土木、物流、農水産等 各種産業資材の販売		〒101-0047 東京都千代田区内神田2-4-4 藤和内神田ビル 営業部 TEL:03-5296-6631・6633 FAX:03-5296-6640 総務部 TEL:03-5296-6641 FAX:03-3255-9890
役 員	取締役社長 鈴木 猛 常務取締役 原田一夫 取 締 役 武田 勉 取 締 役 小川泰英 取 締 役 鈴木悦子 取 締 役 濱田喜則	U R L	http://www.suzushin.com
		主要取引銀行	阿波銀行 東京支店／静岡銀行 東京支店 みずほ銀行 八重洲口支店／三井住友銀行 東京中央支店 三菱東京UFJ銀行 八重洲通支店

※五・音順

□ 取扱商品

主要納入先

諸官公庁・研究機関／電力・原子力関係・ガス会社／電線・通信ケーブル関係
自動車業界／電機・電子業界／鉄鋼・非鉄金属業界／機械・精密機器業界
繊維・紙パルプ業界／土木工事・建設業関係



電力・通信

高い技術力を有するメーカーと提携し、常に最適なご提案ができる体制を構築しています。「架空ケーブルには耐食性に優れた銅線を」「海底光ケーブルには保護用の各種異型線を」など、長年に渡り培ってきた経験により最適な商品を開発・提供いたします。



自動車

日々進化する自動車業界においても、高水準の商品を常に最適な条件で提案・販売できるよう努めています。排気ガス浄化部品用のステンレス線や、エンジンおよび自動変速機部品に使用されるステンレス鋼帯など、多種多様な材料をご用意しております。



機械・鉄鋼

高度情報化社会を支えていく業界にも、多方面で当社の技術が息づいています。ワイヤロープ、圧力計、各種スリングなどの国内一流メーカーの代理店として活動するほか、環境問題を考慮したリサイクル可能な商品の開発・販売も積極的に推進しています。



土木・建設

土木・建築分野においては、安全性・耐久性を常に念頭においた商品をラインナップ。河川および港湾護岸用マリンマット、防風・防砂用エースネットをはじめとする多彩な商品を取り揃え、お客様の満足度向上、さらには快適な未来の創造に貢献しています。



農業・水産業

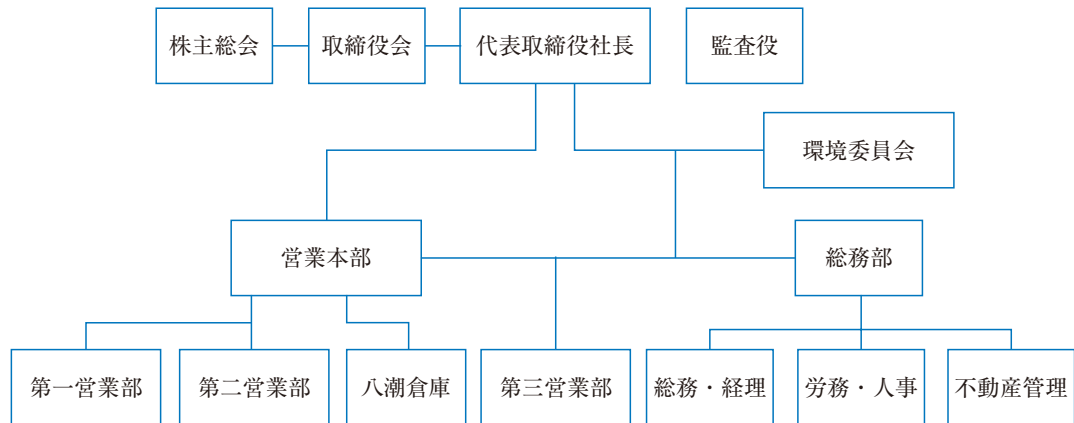
ご利用いただくお客様からご信頼いただけるよう、より高性能・高品質な船舶引揚用滑材の開発に取り組んでいます。また、果樹園用資材のほか、各用途のニーズに合わせて「亜鉛メッキ鋼より線」「鉄より線」「樹脂被覆鉄線」などの小口切断サービスも行なっています。



新素材開発

ケーブル材料の一部で使用されるベリリウム銅合金の応用分野を拡大するほか、高温時における強度、熱伝導率、電気伝導率などがさらに優れた新しい銅合金の開発を推進。Beフリーで環境にやさしく、ベリリウム銅合金の代替材として期待されています。

□ 組織図



□ MAP

本社：神田事務所



JR山手線・京浜東北線・中央線「神田」駅西口より徒歩5分
東京メトロ銀座線「神田」駅西口より徒歩7分
東京メトロ丸ノ内線・半蔵門線「大手町」駅A2出口より徒歩5分



八潮倉庫



つくばエクスプレス「八潮」駅より東武バス15分、
バス停「中馬場」下車徒歩5分



あとがき

創業75年目にして、初めて“社史のようなもの”が出来ました。不足があると思いますので、現・旧社員の方々や親族の皆様からの、ご寄稿を是非お願いし、次の周年事業の折には、次世代の皆様により厚みのあるものを残していければと存じます。

またこの場を借りまして、印刷をお願いいたしました株式会社セントラルプロフィックス様に心より御礼申し上げます。

2010年6月

発行：平成22年（2010）10月1日

発行者：鈴新株式会社

〒101-0047 東京都千代田区内神田 2-4-4 藤和内神田ビル

TEL：03-5296-6641

<http://www.suzushin.com>

デザイン・製版・印刷：

株式会社セントラルプロフィックス

<http://www.central-p.co.jp>

※本書の内容の一部あるいは全部を無断で複製（コピー）することは著作権法上禁じられています。